

留学生アイデンティティの文化論的分析

中 本 進 一

Ⅰ はじめに：グローバル化する教育環境

グローバル化が進む現代社会においては、学術研究者と同様に高等教育機関で学ぶ一般学生たちも異文化環境で学力を発揮することを要求される。専門分野の研究能力に加え、精神的要素も異文化における適応面できわめて重要な要素であるが、これらの両面を充実してゆくことはかなりの負担を強いられる。特に精神的要素がマイナスに作用した場合、偏見を抱くようになり、自分と同じ国籍の学生とのみ行動をともにしたり、受入れ側の言語の使用を回避したりする傾向を示すようになることが経験的観察により明らかになってきた (Shigematsu 2001)。それを受けて米国では留学生の増加を重視し、以前から学内における彼らの適応を対象とする研究を進めている。

グローバル化する教育環境という意味では日本もその例外ではない。文部科学省の白書によると平成14年5月1日現在で外国人留学生総数は95,500人にもものぼり昭和58年の中曽根内閣が提唱した「留学生受け入れ10万人計画」の目標値に急速に到達しつつある。国内の留学生数は他の先進諸国と比較するとまだ低い数字にとどまっているとはいえ、ここ3年間における増加率は過去最高を記録している。平行して留学生に対する積極的な「異文化教育としての」支援策 (横田 1999) やアドバイジングシステムの整備 (白土 1999) が大学側にとって急務となっている。

本稿では、現代社会において「アイデンティティ」があらゆる分野で認知されてきた問題であることを念頭に置き、留学生のアイデンティティの諸相について

分析を試みたいと思う。

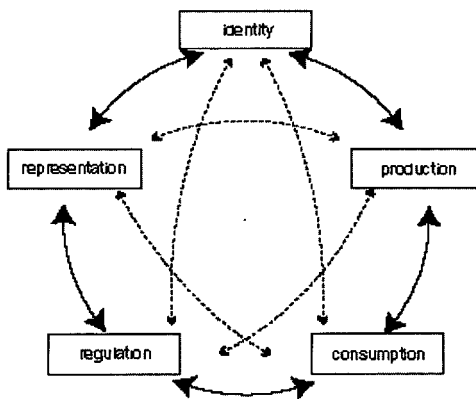
II アイデンティティと文化

そのために先ず「文化の視点」からアイデンティティの考察を試みたい。Stuart Hall が言うように、カルチュラル・スタディーズの知見を導入することで、おそらくアイデンティティに纏わるアンチ・ヒューマニスティックな社会的側面の幾つかを浮き彫りにしてゆけるかもしれないし、また留学生のアイデンティティ問題をより広い視野に立って、再検討を図ることが出来るのではないだろうか (Hall 1996)。そして第二に、アイデンティティは「他者」との関係における、「自己」の存在意義を問う問題でもあるがゆえ、コミュニケーションにおける哲学的視野も考察されるべきであろう。

II-1 アイデンティティの文化論的位置づけ

下の図1に示すように、アイデンティティは最近のカルチュラル・スタディーズの研究においては「文化回路 (circuit of culture)」の中で明確に位置づけされている。(図1)

図1 Circuit of Culture taken from Woodward (1997)



この circuit は直線的ではないし逐次的なプロセスでもない (Woodward 1997). ここに位置づけされたアイデンティティは「文化の中で——表象の象徴的体制 (symbolic system) を通して意味を創造しつつ——生産され、消費され、そして規制されている」(ibid.). この文化回路の重要な部分は、アイデンティティが独立したひとつの問題であるというよりはむしろ生産・消費・規制といった他の文化的プロセスと密接に絡み合っている状態を描写している点であろう。例えば、グローバル化した消費者中心社会では新しく形成されたアイデンティティが国や地域のアイデンティティに優先することもありうるのである。MacKay によると、

「消費行動はある意味アイデンティティの明確な表現法である。我々のアイデンティティは商品の消費という形で成り立っている——そして品物の消費や誇示は我々の嗜好を表現したものに他ならない。であるからして自己や他者に対する誇示は象徴的意義を有し、我々がある特定の文化における一員であることを示しているのである。」(Mackay 1997)

個人のアイデンティティと消費の関係は一見理解しにくいもののように思えるが、実際には我々の日常生活の中で、容易に観察される現象である。例を挙げると、我々は友人から海外旅行帰りに貰う土産品が実は自分の国や第三国で生産されていることに気づき苦笑することがある。これは地元特産品のグローバル化された生産システム向けの落胆の表れに他ならない。また同様に留学生や我々の中には Global Consumer としてのライフスタイルを持つ若者が存在することも事実である。彼らは旧世代によって定義されてきた伝統的アイデンティティに囚われることなく新しい価値観を構築している。そして Nike や Gap といった若者の間に地球規模で普及している商品を消費することに楽しみを見出しているのである。

またアイデンティティは常に規制され監視下に置かれている。教育という名の下でもアイデンティティは商品化され、留学生の場合にも顕著に表れている。例えば、留学生数や外国人研究員数が大学の国際化の指標であると考えられる関係者にとってはその受入れ総数に敏感に反応するであろう。しかしながら、或る短期大

学のケースで批判されたように、留学生受入れが少子化対策の一環として留学生が導入された場合、彼らのアイデンティティが悪徳に近い形で犠牲にされたと解釈されてもやむを得ないであろう（Asahi Com：2002年5月11日及び5月24日）。法務省によって定められる入国管理法の改定も留学生のアイデンティティに大きな影響を与える。平成14年度留学生交流研究協議会の法務省沖貴文氏の報告によると、昭和63年に起きた「上海事件」以来、入国審査および在留資格審査が強化されたことにより、不法滞在する留学生の数が激減しているという。自己の社会的立場というものがアイデンティティと密接に関連していることを考慮すれば、アイデンティティは常に法的規制と共存していると考えることが出来る。

さらに旧世代において確実に定着していると考えられていた伝統的価値観との同一性（identification）は、もはやこのグローバル化が浸透しつつある現代社会においては適用できなくなっている。

「トヨタ氏は東京の大企業の役員を務める日本人男性であり、もう一人のホンダさんは四国にある小さな町の商店につとめる女性店員である。方やミューラー氏はフランクフルトの大商社の専務であり、もう一人のシュミットさんはドイツ北部にある小さな町の子会社の事務員を勤める女性である。この二組がどう言語を使用しコミュニケーションを図れると仮定しよう。こういったペアーのほうが思考、行動パターンにおいて類似するであろうか。従来型の文化的論法に従えばトヨタ氏とホンダさん、そしてミューラー氏とシュミットさんという組み合わせが答えとして正しいと考えられてきた。何故なら同じ国の文化を共有しているという考え方が基礎にあったからである。しかし sub-cultural model ではトヨタ氏とミューラー氏、ホンダさんとシュミットさんという組み合わせを解釈として提案するであろう。それぞれのペアーにおけるジェンダー、職業、職場の規模、そして生活環境等が判断の基準になるからである。」（Sugimoto 1997）

我々は、グローバル化の過程において様々な価値観が縦横に交差し、またそれに伴いアイデンティティも多様に交差しあっているという現状に着目すべきであろう。Main Culture と sub-culture の区分をなくしてしまうような現

象も現代社会におけるグローバリゼーションがもたらす結果のひとつではないだろうか。同様に留学生との出会いにおいても、他者認識が行われる際に我々が頼ってきた国籍や文化といった従来型の範疇が国際化社会においてはもはや一律には通用し難い現状を把握する必要がある。

「アイデンティティ」とは文化的価値を形成するある特定の集団に対する帰属意識であると定義することが出来る。その帰属意識こそが個人が誰であるかを表現する基盤になっている。その対象は宗教、民族、ジェンダー、人種、言語、国家、社会、経済と多様な形をとる (Segal 1997; Nakamoto 1999)。しかもそういった「自己」だけではなく、他者が持つ相手に対してどの集団に属しているかという認識によってもアイデンティティは形成される。

「新しい文化に適応するための更なる必要性は自己と自己を取り巻く他者の行動とその受け止め方を観測することから生じるに違いない。また、異文化におけるさまざまな出来事に対しての意識的かつ批判的考察を試み、自己が馴染んできた文化的枠組みに対抗するような仮説を立てること、そして社会的相互関係における新しい概念を創造することが異文化適応に重要になってくるかもしれないのである。」(Matsumoto, et al 2001)

換言すれば、アイデンティティは自己の他者との複雑な関与、つまり個人の社会的関係と同義であり、現代社会においては自己内においても多種多様なアイデンティティが衝突や対立しあうことも多々ある。自己のアイデンティティは他者とのそれと相関関係をなし、同様の複雑化現象が他者内にも生じていると考えれば、その複雑さは無限であろう。

II-2 アイデンティティの構築

アイデンティティの構築には表現体系 (representation systems)、歴史・民族等の共有性、そして差異という3つの局面がある。第一に、文化的過程としてのアイデンティティは言語的、非言語的表現体系を通じて形成される。ソーシャルによると、個人を取り巻く世界の概念形成は言語的偏重が強いとされている (Culler 1976)。自分の方言や訛に固守することは言語的表象であり、お国自慢の国際行事等に民族衣装で現れることはアイデンティティから生じる非言語的表

象であると解釈することも可能である。

「表現体系とは言語を使用して心の内にある概念を意味として生産することである。また概念と言語の連結こそ、現実の世界に存在する物、人物、または事象、想像上の世界にのみ存在する物、人物、または事象等を参照することを可能にしてくれるものである。」(Hall 1997)

言語的であれ、非言語的であれ、表現体系が存在するからこそある特定の文化に属する構成員同士が意味を共有することが出来るのである。つまり、同じ文化に属しているということは広い意味で類似する概念地図 (conceptual map) と言語的記号の解釈法 (the way of interpreting the signs of a language) を共有していることを意味している (Hall 1997)。それゆえ、個人の社会的適応を考えれば、言語能力自体非常に重要な役割を果たしていると言える。ある研究によれば、米国に学ぶ中国、日本、韓国からの留学生たちのストレス度が高いとされている。その主な理由の一つとして Oropeza 他はこれらの国々では母国語のみが公用語として使用されているからだと指摘している (Oropeza et al. 1991)。また、

「言語、非言語を使用する振舞い、価値観、基準、姿勢、規則等あらゆる文化的具現における違いにより、異文化適応は摩擦、フラストレーション、葛藤等で溢れている。しかし実際これらは文化が異なるが故の避けては通れないものなのである。これらの摩擦を起こしうるコンテクストはしばしばネガティブな感情と一緒に加速する傾向にある。」(Matsumoto et al. 2001)

さらに留学生が日本社会に溶け込む手助けをするために彼らと交流する必要があるのは日本人でも教育者或いは「ボランティア精神」を持った人間に限定されるという報告もある。(Cigler & Matsuoka 1998) 母国語でない言語使用を強いられる環境での生活はストレスが溜まるだけでなく、ある意味アイデンティティの剥奪という状態にあると言えないだろうか。

第二に、留学生たちは、新たな文化的環境へ生活を移す、つまり新しい歴史を開始するという観点から、共有する過去や人種的、民族的、或いは、国家的同胞意識がアイデンティティ構築の基礎になっているということが出来るだろう。

『私は地球人だ』とモーリシャス人の両親を持つグラスゴー生まれのレザ氏は語る。『私はどの大陸に属しているというわけではない。肌は茶褐色だが自分のことをモーリシャス人とは感じていない。しかし、海外に出ると自分がイギリス国民であることを強く感じることもある。』(Giles 1997)

確かにレザ氏は普通の生活において如何なる特定の枠組みにもアイデンティティを持たず、彼自身が特定の国家に属しているとは見てはいないが、海外に身を置いたときにはイギリス国民としてのアイデンティティを感じると認めている。この社会文化的観点においてはアイデンティティが個人の歴史と同等であるといっても過言ではないであろう。国民的アイデンティティは国を超えた結果生じる経済的、文化的生活基盤の変化から出現してきたものである。というのも文化環境を移動したことにより共有してきた過去が浮き彫りにされたからに他ならない。この現象自体、国籍という絆を希薄にさせるグローバリゼーションの過程とは一見逆行しているように思えるかもしれないが、精神的不安をもたらすカルチャーショックが個人の国家(国民)的アイデンティティの根本的な増幅器の役割を果たしているであろうことが予測される。

更にアイデンティティは差異に特徴づけられた「他者」の存在によって形成されてゆく。換言すればアイデンティティ自体が言語を通して社会的に構築された分類体系(classification system)に裏付けされた差異に依存しているということが出来る(Woodward 1997)。ソシユール言語学派の立場を借りれば、二極化したポジション——差異を作り出す最も顕著なケース——が意味の生産において最も基幹的な役割を果たしていると論じている(Hall 1997)。またGatesも主張するように、日常で頻繁に使われている‘Europe/non-Europe’や‘white/color’といった表現の使い方そのものがカテゴリーを編成する機能を果たしているのである(Gates in Lemert 1993)。Gatesに言わせれば「人種」という言葉自体、生物学的本質を現してはおらず、単に社会言語的な一範疇の構築に過ぎないのである。

同様に日本人学生と区別しつつ「留学生」という分類化の中で彼らと呼ぶ日本語の慣用法が外国人留学生たちの存在を特殊化し、アイデンティティの他者的定

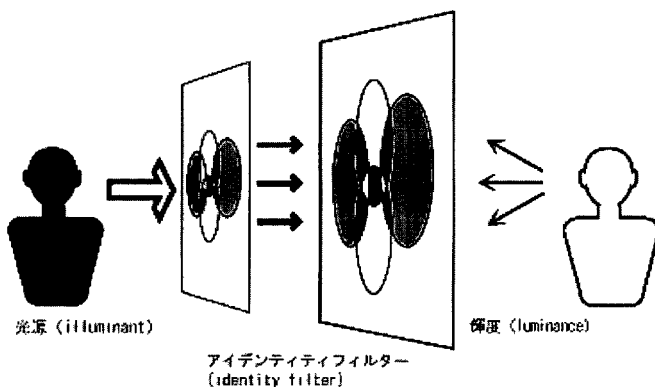
義を強調する要因となっていないだろうか。留学生という範疇の中においてもその内部はさらに複雑な細分化を見ている。というのも文部科学省によって施行される選考過程を経て国費留学生となった者と私費留学生という区別も彼らの社会的、経済的アイデンティティの差異に結び付いていると言えるからである。また学部生・大学院生といった肩書きも同国人同士の集団内でアイデンティティの在り方に影響を与えていると当然予測できる。さらには留学生の家族がおかれている状況、ジェンダー、住居問題、経済的要素など、それぞれの受入国の文化に特有の分類体系が大きくこの問題の原因となっていることも事実であろう。例えば、荻田(1986)が述べているように、日本社会が男性中心の文化として特徴付けられるならば、留学生教育に携わる者は女子学生にさらなる気を配る必要が出てくるに違いない。というのも彼女たちの抱えるアイデンティティの危機感は男子学生のそれよりはるかに複雑になってくるからである。従って上記にあげた如何なる分類体系における差異も留学生たちのアイデンティティ構築の一因となりうるのではないだろうか。

II-3 コミュニケーション・モデルとアイデンティティの位置づけ

上記の事柄をまとめると、アイデンティティは多面性を有し、それは個人が様々な文化的サブカテゴリーとともに生き、また構築し、そして変化させてゆくことを意味すると言い換えることが出来る。さらに別の言い方をすれば、アイデンティティは「玉虫色」なのかも知れない。筆者独自の表現が許されるなら、アイデンティティは照明工学の分野で定義されている映写機、舞台芸術における照明技術の如く、色の変化が可能な濾過性の投影された映像のように仮定することが出来るのではないだろうか。個人が持つある種の同一性認識は光源 (illuminant) により投影され、アイデンティティフィルターを透り映し出される。そしてそれは他者に可視光線 (オングストローム) の輝度 (luminance) と解釈される。実際のコミュニケーション過程においては、光度は照度の強弱 (lx) とその角度によって変化して見えるのである。また受け取り側の解釈は相手のアイデンティティの輝度によっても異なってくる。しかしこの図2にあるように受け取り側が相手の映像の全てを瞬時にして把握することは非常な困難を伴うことにな

る。(図2)

図2 アイデンティティフィルターモデル



従ってコミュニケーション・モデルにおけるアイデンティティの位置づけは橋本の「非言語コミュニケーション・プロセスモデル」(1993)や山口のコミュニケーション・モデル(1986)で図解されている「フィルター」の位置に似たものになってくる。また松岡の「エディティング・モデルの交換」(2001)で定義されている「意味の市場」の相互理解領域にアイデンティティのスクリーンが存在することになる。コミュニケーションに従事している両者の関係は照明の角度に影響を及ぼすであろうし、この図においてもStewartの(between)、Zephyrの(spiritual child)、あるいはBuberが提唱する(interhuman)等の概念として定義される理解領域を創出している(Stewart 1982)。仮に照明角度が相互に対等な状態で正面から映し出される場合には理解におけるコミュニケーション過程は一方的ではない収束した形を取ることになる。

留学生も時にはある特定の国籍を有する一国民として、またある時は教授から研究指導を必要としている一学生として、さらには恋愛を経験する一人の男性・女性としての自分を投影する場面を経験しているのである。当然留学生たちが

「自分が外国からやってきた学生である」というイメージを相手に提示することを常に望んでいるわけではない。それにも関わらず日本人大学職員や教員の中には「留」学生という言葉から発する偏見からか極度に萎縮したり威圧的な態度で接したりする者も存在するが、筆者はこれをカテゴライゼーションによる一種の「社会悪」と見ている。何故なら例え無意識的にせよこういった便宜による分別化により留学生たちが投影しようと試みているアイデンティティの多層的色彩性を無視し、否定し、拒否していると思えるからである。

II-4 イメージの伝達者：メディア

アイデンティティへの影響において他者のもつ認識は重要な役割を果たしている。イメージを創造することに関して言えば、メディアはわれわれの現代社会においては決して無視することなど出来ない。それどころか細心の注意をもって観察する必要があると思われる。というのもメディアによって企てられた事象は我々の日常を反映しているとは決して言えないからである。メディアを考察するには、先ず事象がどのように表現されているか、そしてメッセージがどのように伝達されているか、最後にその意味の正当性が作られていく過程等を観察するべきであるとHall (1977) は述べている。つまり、メディアが見せるアイデンティティも同様に分析を試みることで視聴者への影響を推測することが出来るであろう。ここではどのように留学生たちの姿が日本のメディアに映し出されるかを簡単に追ってみようと思う。

2002年3月まで放送されたTBSの人気番組「ここがへんだよ、日本人」では毎週100名の外国人を画面に映し出していた。この番組の当初のモチーフは日本人国民のための異文化理解にあったようにも思えるが、こういった類の番組は基本的にはお笑いを目的にしたバラエティ番組であるという指摘もある(辛：2000)。結局TVメディアに登場する外国人の多くが嘲笑の対象となっていたといえるのである。彼らの幾人かは過激な日本語の使い手として、また日本語の話し方を知らない無知の対象としてテロップとともに画面に映し出されていた。これではこの番組が日本に住む外国人の理解に貢献していたとは言い難いであろう。

CMにおいても留学生らしきタレントが登場してくる。ここで一つのCMを

取り上げ、記号学的に分析を試みたいと思う(山田 2002)。例として取り上げたのは「レオパレス21」で、この中で「隣は留学生」という台詞からナレーションに入り、画面では新しい日本人の賃貸人に対して留学生が日本茶を勧める場面からストーリーが展開する。記号学的には、この場面は日本の習慣を知った留学生が若い日本人をもてなすというように、逆の文化的立場を利用することで視聴者の笑いを引き出そうと試みていると解釈できる。他の部屋が近代的西洋風の室内装飾が施されているのにもかかわらず、彼女の部屋だけが畳を使用した純和風なのである。(表1)

表1 「レオパレス21」の記号学的分析

Signifier	Signified
田中玲奈(人気女優)	若い独身女性, 女子大生, 安全な環境
西洋風近代建築	清潔, 新しい, モダンな
「隣は留学生」	国際的な, オープンな, 現代の
留学生(茶道の礼儀に従って正座でお茶を出す)	白人, 西洋, 日本の文化・生活に従順な, 女性的, 安全な, 若い, しかし不器用な
敷金, 礼金不要家具付	格安, 便利, 一時的な
「私は一人暮らしを満喫している」	静かな, リラックスできる, 私有の

これらのメディアに登場する留学生を見る限り、彼らが嘲笑の対象であり、不器用さの象徴の如く表現されているイメージを否定することは困難である。これらのショービジネスの多くにおいては、日本人が留学生や外国人に抱いているステレオタイプ化されたイメージに反映するような演出が施されている。日吉によると、問題なのは画面には常に外国人に対して屈辱、興味本位、偏見等が描かれているという事実なのである。前述したように「差異」が生産され、表現され、規制され、消費されるうえメディアではそれが過度に強調されているのである。従って、外国人・留学生への過剰な扇情主義が伝達され、肯定されることにより、歪んだイメージの定着が行われる。このような日本人側のステレオタイプを持つ

てしては、コミュニケーションにおけるバランスは偏ったものになる恐れを含むことにはならないだろうか。

III カルチャーショックとアイデンティティ・クライシス

一般に知られるアイデンティティ・クライシスは、安定していると思っていた感情と、個人に経済、文化、または社会的環境の変化をもたらす現実との間の板ばさみのジレンマがもたらすものである。Gauntlettが主張するように、アイデンティティの流動化や揺らぎは実際には誰もが経験するものである。

「自分のアイデンティティに疑問も一抹の不安も抱いたことがない、と言張る者でさえ、人生においては重大な選択を余儀なくさせられる時がやってくるであろう。その選択は身だしなみや余暇の過ごし方などの日常的なものから人間関係、信仰、職業などの重大な影響を及ぼすものまでに及ぶ。」(Extracts available at www.theory.org.uk)

アイデンティティが固定化したものであるとは言いがたい。確かにある一定の期間の継続性があるが、地理的な移動自体がその継続性を断つことになる上(Giddens 1991)、それが心理的な不安定を引き起こす結果を生じることもある。このような疑念や不安は住居、子供の教育、言語、人間関係などに悩みを持つ留学生たちの生活ストレスに当てはめることが出来るであろう。これらのどのストレス因子もアイデンティティ・クライシスの原因となりうる。Hofstede (1991)の作成による文化変容のカーブでは異文化的環境において何人か(差別されているとか、いつまでも自分は受け入れられていないと感じている者)はマイナスの状態が持続するのである。まさに March 他 (1976) が言うようにすべての人間社会は科学技術、法、宗教等の分野で「不確実性の回避 (uncertainty avoidance)」に特徴付けられている。この不安による混乱状態は個人的のみならず社会的にも定義される。つまりそれは何か得体の知れないものに対しある文化の構成員たちが共通に抱く脅威の度合いでもある。従って、異文化的接触は滞在者とそこに元から住んでいる者の両者に対しアイデンティティ・クライシスの原因となる不確実性(不安)をもたらすことになる。もっと具体的に言うと、留学生に

出会う日本人もある種のカルチャーショックを経験しているということである。

Althen (1995) によると留学生のカルチャーショックというものは部分的には社会的地位とも関係している。大学生の社会的地位が比較的低いとされるアメリカを例に挙げると、学生が高く評価され尊敬される国から留学渡米し、特に社会経験を積んだ者がそのギャップに当惑させられることが多いようである。

「留学生の多くは、ステレオタイプ化され、一個人として扱われないことに非常に不快感を感じます。アメリカ人に『留学生』あるいは『東洋人(またはラテンアメリカ人、アラブ人等)』として扱われることが多く、一個人として見られることが少ないからです。留学生は、このような体験を無礼な行為と受け止めます。」(服部他〔監訳〕から抜粋)

日本における学生の社会的地位がアメリカに比べて高いかどうかは別にしても、ビジネス経験を持つ社会人と学生の間にある垣根は容易に想像できる。つまり社会人の大学院留学にはステータス・ショックの要素も存在するのである。ところで「不確実である」状態とは決して否定的側面ばかりでもないように思える。確かにストレスフルには違いないし、長期間の許容量を越えるストレスは当然避けられるべきである。しかし Adler (1972) が指摘しているようにカルチャーショックやステータス・ショックによって引き起こされるアイデンティティ・クライシスについては、肯定的な見方も可能であり、奥深いレベルでの異文化間教育には必須でさえある。

「異文化間体験はその体験自体の結果として人間的成長や学習、そして変化というものを気づかせてくれる。カルチャーショックの過程を経て、個人は新しく自己の視点を持ち、自分自身の明確なアイデンティティの理解に到達することが出来る。」

アイデンティティ・クライシスは異文化適応過程において人間的成長の鍵と捉えることが出来るのである。つまり留学生がアイデンティティ・クライシスに陥った時期こそ成長において最も貴重な局面であり、それを手助けする役割を持つという意味で留学生アドバイザーが最も重要な存在になる時ではないだろうか。

III-2 アイデンティティと変容

異文化間であれ、対人関係であれ、コミュニケーション過程で何が起きているかを観察するためには、その過程を推定描写するための哲学的スタンスを定義する必要がある。つまり、他者との関係についての定義についてであるが、Seneca や Plato にとってコミュニケーションとは「愛」と同義語であった。同様に Fromm も他者との隔離感を回避するために愛を定義している。カントは尊敬を鍵とみなし、人格主義の立場から Max Scheler は「共感」を定義している(片山他〔監訳〕1998)。アイデンティティの構築が他者の存在を土台にしていることを考慮すれば、「コミュニケーション」は「他者との関係を反映するアイデンティティの局面的移行による共有域の模索」として定義することは出来ないだろうか。

「出会う他者により自己は常に変わるものであり、自己とは出会う他者の反映である数々の自己の集積以外のものではないことになる。そこにおいては、アイデンティティを構成する重要な要件である、一貫性を求めることは困難である。」(亀山 2002)

ではアイデンティティは異文化との遭遇においてどのように変容するのだろうか。例えば性格心理学の異文化適応研究において様々なアイデンティティの変容を見て取ることが出来る。Berry (1997) が指摘するように、異文化適応が起こるとき、ふたつの要素を考慮しなければならない。どの程度受入れ側の文化 (host culture) に同一性を見出しているかという点と、どの程度自文化 (home culture) に同一性を見出しているかという2点についてである。これら2つの要素が組み合わさると、「統合 (Integration)」「同化 (Assimilation)」「離脱 (Separation)」「無視 (Marginalization)」という4つの適応形態が想定できる。「統合」とは受入れ側と自分の両文化に肯定的な姿勢を持っている状態、「同化」とは受入れ側には肯定的だが自文化には否定的な姿勢、「離脱」とは自文化には肯定的だが受入れ側の文化には否定的な姿勢、「無視」とは両文化に否定的な姿勢をそれぞれ持つことを意味している。

当然「統合」が異文化間理解の視点からは理想的な形態であることには違いないが、他の形態、例え「無視」であっても肯定的要素は残しているとみなすべき

である。何故ならこれら一つ一つの形態が決して固定され変化のないものではないことが推測可能であるからである。(Barry & Sam 1997)

Black 他(1999)も海外在留の企業幹部を対象に類似した研究を行っている。かれらの提唱する Allegiance Model と Berry の4形態を比較すると丁度自文化と受入れ側の文化が本社と駐在支社に置き換えられた状態であることが見て取れる。(表2)

表2 Allegiance Model

		Allegiance to the parent firm	
		Low	High
Allegiance to the local Low firm	Free agents		Heart-at-the-parent-company-expatriates
	High Going native-expatriates		Dual citizens

確かに Berry の研究の対象者と明らかな相違点はあるが, free agents, heart-at-the parent-company-expatriates, dual citizens, going native-expatriates の4分類はそれぞれ「無視」「離脱」「統合」「同化」という概念と大変似通っているといえる。このモデルにおいては「忠誠心 allegiance」は帰属意識(アイデンティティとも換言できる)と関係が深いことから、「無視」や free agents といった帰属意識の少ない形態を肯定的に解釈すれば、文化適応において独立性、独創性の高い形態をとっているといっても過言ではない。

IV 結語

われわれを取り巻く社会的環境がグローバル化してゆくにつれ、アイデンティティは認知度の高い重要な問題となってきている。同様に昨今の教育環境において留学生問題も複雑化している。本稿ではアイデンティティの様々な諸相に着眼しカルチュラル・スタディーズの見地から再考を試みた。アイデンティティは現

代社会において生産され表現され、消費され、さらには規制されており、留学生のケースにおいてもこの circuit に適用可能であった。この研究により全体像としてのアイデンティティ問題の多次元性、特に日本人と留学生のコミュニケーションにおいての影響が明らかとなった。その多面性にもかかわらず、テレビのバラエティ番組やCMといった大衆メディアに登場する留学生のイメージが正しく表現されているとはいいがたい。彼らのイメージは歪められ、多くの場合、日本の商業主義の名の下で過度に単純化され、エンターテインメントの対象として見世物になっているようである。異文化適応の研究から明らかなように、現実には留学生たちはコミュニケーションの相手次第で様々な文化適応形態を用いている。それゆえ、アイデンティティは時と状況、出会う人によって変化し、玉虫色のようにも思えるが、それらの変化も異文化での人間的成長にとっての「創造的」な適応のための一過程として解釈されなければならない。

留学生と接する側の者としては彼らが明示しようとしている人間の複雑性により敏感になることで自己の複雑性も投影できるようになるべきであろうし、アイデンティティの可変性やその諸相、さらにはコミュニケーションにおけるメカニズムについても心得ておく必要があると思える。こういった理解をなくしては、アイデンティティの多面性を無視する単次的コミュニケーションやステレオタイプ化に陥ってしまう危険性が非常に高いと考えられるからである。

参考文献

(外国語参考文献)

- Adler, P.S., 1972, 'Culture shock and the cross cultural learning experience. *Readings in Intercultural Education, vol. 2*. Pittsburgh: Intercultural Communication Network
- Althen, G., 1995, *The Handbook of Foreign Student Advising*, Maine: Intercultural Press
- Berry, J.W., 1997, 'Immigration, Acculturation, and Adaptation', *Applied Psychology: An International Review*, 46, pp. 5-68

- Berry, J.W. and Sam, D.L., 1997, 'Acculturation and adaptation.' In J.W. Berry, M.H. Segall, and C. Kagitchibasi, eds., *Handbook of Cross-Cultural Psychology, Social and behavioral applications*, pp. 291-326, New York: Allyn and Bacon
- Black, J.S. and Stephens, G.K., 1989. 'The influence of the spouse on American expatriate adjustment and intent to stay in Pacific Rim overseas assignments' , *Journal of Management* 15, pp. 529-544
- Cigler, M. and Matsuoka, H., 1998, 'Japanese Language Acquisition and Learners' Integration into Japanese Society' , *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, vol. 39, December 1998
- Culler, J., 1976, *Saussure*, London: Fontana/Collins
- Fromm, E., 1982, 'The Theory of Love' , in Stewart, J., ed. 1982, *Bridges Not Walls: A Book about Interpersonal Communication*, New York: Newbery Award Records, Inc.
- Gates, H.L. Jr., 1993, 'Race as the trope of the world' , in Lemert, C, ed., 1993, *Social Theory: Its Uses and Pleasures*, Oxford: Westview Press
- Gauntlett, D, 2002: *Media, Gender and Identity: An Introduction*, Routledge, London and New York. (Extracts available at www.theory.org.uk)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Policy Press
- Giles, J, 1997, *Introduction to the study of contemporary societies and culture*, School of International Education, University College of Ripon and York St. John, A College of University of Leeds
- Hall, S., 1977, 'Culture, the Media, and "Ideological effect"' in Curran, James Gurevitch, Michael and Woollacott, J., (1977) *Mass Communication and Society*, London: Edward Arnold
- Hall, S., 1996, "Race, Culture and Communications: Looking Backward and Forward at Cultural Studies" in John Storey (ed.) *What is Cultural Studies: A Reader*, Arnold Publishers
- Hall, S., 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London, Sage/Open University
- Lemert, C., ed., 1993, *Social Theory: Its Uses and Pleasures*, Oxford: Westview Press
- Leopalace 21*, <http://www.leopalace21.com/index.html>
- Hofstede, G., 1991, *Cultures and Organizations: Software of the mind*, London: McGraw-Hill International

- Mackay, H., 1997, *Consumption and Everyday Life*, London, Sage/Open University
- March, J.G. and Johan P. Olsen, 1976, *Ambiguity and Choice in Organizations*, Bergen, Norway: Universitetsforlaget
- Matsumoto, D., LeRoux, J., Ratslaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C., Araki, S., 2001, 'Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: the Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS)', *International Journal of Intercultural Relations*, 25 (2001), pp. 483-510
- Mercer, K., 1990, 'Welcome to the Jungle: Identity and Diversity in Postmodern Politics' in Rutherford, J., 1990, *Identity, Community, Culture, Difference*, London: Lawrence and Wishart, p. 43
- Nakamoto, S., 1999, 'Identity and Identity Crisis from a Global Perspective', *Bulletin of College of Industrial Technology*, vol. 33, March, 1999, pp. 15-24
- Oropeza, B.A.C., Fitzgibbon, M., and Baron, A., 1991, 'Managing mental health crises of foreign college students', *Journal of Counseling and Development*, January/ February, 69, pp. 280-284
- Segal, L., 1997, 'Sexualities', in Woodward, K., (ed.), 1997, *Identity and Difference*, London, Sage/Open University
- Shigematsu, M.S., 2001, 'Understanding and Counseling International Students with Acculturative Stress', *Journal of International Student Advisors and Educators*, vol. 4, 2001, pp. 1-12
- Sodowsky, G.R. and Plake, B.S., 1992, A study of acculturation differences among international people and suggestions for sensitivity to within-group differences, *Journal of Counseling and Development*, vol. 71, pp. 53-59
- Stewart, J., ed. 1982, *Bridges Not Walls: A Book about Interpersonal Communication*, New York: Newbery Award Records, Inc.
- Sugimoto, Y., 1997, *Introduction to Japanese Society*, London: Cambridge University Press
- Van Oudenhoven, J.P., van der Zee, K I., and van Kooten, M., 2001, 'Successful adaptation strategies according expatriates', *International Journal of Intercultural Relations*, vol. 25, 2001, pp. 467-482
- Woodward, K., 1997, *Identity and Difference*, London, Sage/Open University

(日本語参考文献)

Asahi Com., May 11, 2002: <http://www.asahi.com/>

Asahi Com., May 24, 2002: <http://www.asahi.com/>

- 荻田セキ子 1986『文化「鎖国」ニッポンの留学生』学陽書房
- 片山他(監訳)1998 Julia, D. 1994, *Dictionnaire de la philosophie*, Larousse「ラルース哲学辞典」弘文堂
- 亀山佳明, 富永茂樹, 清水学(編)2002「文化社会学への招待:〈芸術〉から〈社会学〉へ」世界思想社
- 白土悟 1999「異文化間教育としての留学生アドバイザー」異文化間教育13
- 辛 キュチュール 2000「私か感じた日本」, 留学交流, vol. 12 no. 12
- 橋本満弘 1985「非言語コミュニケーションの概念と特徴」『コミュニケーション論入門』桐原書店
- 服部まこと・三宅政子(監訳)1999『留学生アドバイザーという仕事』東海大学出版
- 日吉昭彦 2002, <http://www.note-to-tone.tv/hiyoshi/>
- 法務省・沖貴文「留学生および就学生の入国・在留審査方針の変更について(平成12年1月)」平成14年度留学生交流研究協議会配布資料
- 松岡正剛(著)2001『知の編集工学』朝日文庫 朝日新聞社
- 山田美智子 2002「マスメディア(CM)と異文化コミュニケーション」伊佐雅子(監)「多文化社会と異文化コミュニケーション」三修社
- 山口真人 1986「コミュニケーション・プロセス」南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」第4号
- 横田雅弘 1999「留学生支援システムの最前線」異文化間教育13
- (一橋大学大学院法学研究科講師)